

まちづくりミーティング開催結果概要



開催テーマ

地域防災力の維持・向上を図るための環境整備

参加者

- 消防団本部 8名
- 桐生市長
- 傍聴者 1名
- 報道機関 3名

日時：令和4年8月18日（木）16時～17時
場所：桐生市消防本部庁舎 3階会議室



- 1 開会
- 2 あいさつ
- 3 自己紹介
- 4 議題

地域防災力の維持・向上を図るための環境整備

意見交換のポイント

- 消防団の活動を通じて感じていること
- 地域防災力の維持・向上を図るために桐生市と共創したいこと 等

- 5 閉会

桐生市消防団について



地域特性の課題

- 市域の約7割を山林が占めていることから、降雨量が少なく、空気の乾燥する春先（1月～5月）に林野火災の発生が多い。
- 市街地には渡良瀬川や桐生川などの大小の河川が流れていることから、土砂災害や河川氾濫などの対応や、近年の記録的な大雨等による経験したことのない自然災害への対応が課題である。



桐生市消防団の取組

消防団では消防本部と合同で林野火災対応訓練やブラインド型災害対応訓練を実施している。また、令和4年6月29日には、災害時における各機関の役割や他機関との連携等を確認し、激甚化する自然災害に備えることを目的に、市役所・消防本部・消防団の参加による水害を想定した「ブラインド型災害対応合同訓練」を実施した。



ブラインド型災害対応合同訓練の様子

ボンプ操法競技大会

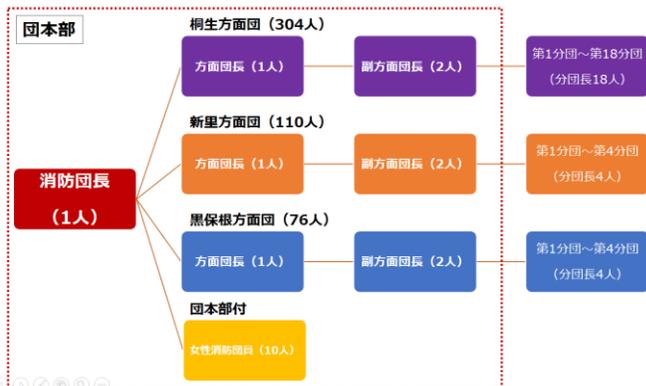
秋季点検 放水訓練

出初式 分列行進

女性消防団員による住宅用火災警報器普及活動

桐生市消防団組織の概要

桐生市消防団：510人（令和4年4月1日時点）

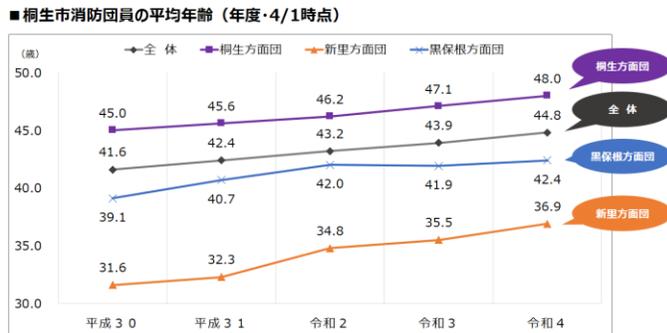


消防団が抱える課題

全国的に消防団員数が減少する中、本市においても減少傾向であり、「桐生市消防団条例」で定められている定数の598人を下回っている。



桐生市においても消防団員の平均年齢は年々増加しており、特に桐生方面団の平均年齢が高い。



消防団組織の概要
令和4年4月1日時点で団員数は510人である。消防団は桐生、新里、黒保根方面団に分かれており、団長以下、各方面団の団長と副団長で団本部を組織している。

消防団が抱える課題
全国的に消防団員数が減少する中、桐生市も減少傾向であり、条例で定められている定数の598人を下回っている。

また、全国的に消防団員の高齢化が進む中、桐生市においても高齢化が進んでおり、平均年齢が年々増加している。特に桐生方面団の平均年齢が高い状況である。

地域特性の課題
桐生市の面積の約7割を山林が占めていることから、降雨量が少なく、空気が乾燥する春先、1月から5月に山林火災が多い。

令和3年度は、黒保根地区で山林火災があり、足利市でも発生した。また、市街地には渡良瀬川や桐生川などの大小の河川が流れていることから、土砂災害や河川氾濫などの対応や、近年の記録的な大雨等による経験したことのない自然災害への対応が課題である。

消防団の取組
消防団では消防本部と合同で林野火災対応訓練やブラインド型災害対応訓練を実施している。

また、令和4年6月29日には、災害時における各機関の役割や他機関との連携等を確認し、激甚化する自然災害に備えることを目的に、市役所・消防本部・消防団の参加による水害を想定した「ブラインド型災害対応合同訓練」を実施した。

こういったシナリオのない実施訓練は大変重要であると考えている。



消防団員数の減少については、特に昼間の火災や災害の際に問題となっている。

団員確保に向けた取組については、のぼり旗を立てるほか、パンフレットの配布をしているが、それを見て、入ってくる方は中々いないので、消防団の活動を知ってもらう取組を行う必要があると考えている。

また、消防団員の平均年齢については、機能別消防団員も含めて上がっている。これは、消防団を卒業後に機能別消防団に入る方もいるので、その結果として、平均年齢が上がることとなっている。

そのため災害時の対応における体力面も踏まえ、若い団員の確保は、非常に重要である。

私が若い頃と今では子育てに係る男女の役割が変わってきていると思う。以前は、男性は外で仕事しているれば良くて、女性が家で子育てを行う社会風潮であったが、今の若い人は何をやるにも奥さんに何いを立てることが多いと思う。

そのため、若い人に消防団に入ってもらうには、消防団の活動に対して、奥さんに理解してもらうことが重要であると考えている。

若い団員の確保とこれまで頑張ってきてくれた団員とのバランスを調整しながら、団員数の確保に向けた取組を工夫して取り組んでいきたい。



昨今、町会長でさえも中々なり手が見つからず、代替わりができないことから高齢化が進んでいると聞いている。近い将来、分団においても同じ状況になるのではと危惧している。

仮にその方が病気に倒れたら、分団の活動そのものが停滞してしまう恐れもある。

自分の分団については、自然に若手との入れ替わりがされてきたが、次のなり手がいないといった声は各方面から出ていることが団本部に入り把握できた。

そのための対処方法について、喫緊の課題として情報を共有しながら、共に検討していく必要があると考えている。



消防団にとって、災害に備えた様々な訓練は大変重要であると考えている。訓練の積み重ねにより、有事の際にも力が発揮できると思う。

昨年度、団員にアンケートを実施したところ、消防でないとできないような訓練を取り入れてほしいといった意見もあった。

そういう観点から、消防団員を確保する手段として、様々な訓練ができることや、例えばAEDの資格を取得することができるとか、そうしたことをPRすることも良いのではないかと考える。



新里地区についても、若い人との入れ替わりが難しくなってきたと感じている。

そのため、分団長を経験された自営業者の方に機能別消防団に協力してもらおうなどし、即戦力的な形で団員数を確保したケースもある。

また、新型コロナウイルスの影響により、若い人を交えた共同訓練ができていないといった課題がある。

今後、分団員による訓練を通じ、昼間の火災対応に備えられるよう取り組むとともに、若手の確保についても検討していきたい。

私が消防団に入ったときは毎年6月の入れ替えなどにより、10年程度で消防団生活が終わったが、近年は難しい状況である。

また、以前の団員はほとんどが農家や自営の方だったが、今は半程度がサラリーマンになっており、活動に出てくれる人と出てくれない人の差が極端になっている。

それでも、新里地区では農家の方々や若手が一定数いるので、昼間の火事にも対応できているが、数年後には難しくなるのではないかと危惧している。

団員数の確保に当たっては、先ほどの意見にもあったが、女性、奥さんの理解を得ることは重要である。

消防団に対して、派手に飲んで遊んでるといった一昔前のイメージを持つ方がいるが、そのようなことはなく、有事の際には真剣に活動をしているので、その辺のアピールが必要であると考えます。

また、昨年実施したアンケートの回答に、「消防団の活動を通じて色々な職種の方々が集まり、同じ方向に向かって訓練したり、入らないとできない活動があり、入るとやっぱり仲間ができてよかった」という意見があった。

消防団に入ることで感じられる良いことも含め、消防団の取組をうまく伝えることにより協力してくれる家庭や人が増えるのではないかと考える。





地域防災力の維持向上のためには、災害に関する危機感をみんなが持っていることが重要である。

例えば、近所の人とお茶を飲むときでも、事あるごとに、もしテレビで報道されているような災害が起こったら、逃げる必要があることを伝えている。

そして、「逃げる」って言った時に逃げてもらえることが、防災力の高まりの効果だと考える。

地域の方をはじめ、消防、市役所、関係する人たちが常に災害に関する意識を持ち、暮らしていることが重要である。

災害をすべて防ぐことはできないということも前提に、起きてしまったときに、一人も不幸な人を出さないようにするのが、ここにいる我々みんなの役目だと思っている。

消防団だけではできないことは、地域の人にも手伝ってもらいながら、頼れるところに頼り、協力しながらみんなと一緒に取り組むことが重要である。

長い間消防団の活動をしてきて、やって良かったなと思うのは、何とか火を抑えて、「どうもありがとうございました。」って地域の人たちから言われる。そういった時である。

黒保根地区でも団員数の減少とサラリーマン化が進んでおり、仕事の多様化から勤務体制も様々となり、地域との繋がりが希薄になってきている。

そのため、少しでも希薄化を緩和できるように、不定期であるが、地元の消防団で小さなお祭りを行い、家族で地域の人たちとのコミュニケーションができるよう、接点を作るよう取り組んできました。

そのことで、若い世代が、多少なりとも消防団に入ってくれている。その入ってきた人達に役割を与えることで、自分が必要とされていることを実感してもらえる環境を作ることが、重要であると考えている。

そうした取組のすべてが実績に結びつかなくても、そういった方向性、思いを後の人に繋げていきたい。

現場に行くと、地域の人たちが消防団のウェアを見たときに、安心して、もう大丈夫だって思ってもらえるような、そういった意識で取り組んでいけたら良いと思っている。

地域防災力の維持・向上を図るために桐生市と共創したいこと 等



(市長)

それそれ現場の中で活動している方々の生の声だというふうに思う。その中でもやはり団員の確保に関する課題については、圧倒的に意見が多かった。私が分団長だった時には、餅つきやお祭り、花火など、様々な地域行事に、ポンプ車を持って行き、地域の人と活動した。そうした行事を通して、コミュニケーションが取れたり、コミュニティの形成が自然にできていたが、新型コロナウイルスによって地域活動が限定されてしまったこともあり、大規模災害の際の消防団の活躍も含めて、地域の方々に活動が理解してもらえない状況もあるのではないかと思う。

そうしたところでは、昨年度の黒保根の山林火災では使命感に満ちた皆さんの団結力を目の当たりにして、とても感動した。消防団の活動により、我々の命や財産が守られているといったことを市民に伝えることは重要である。

ここで、消防団の定数について、意見を伺いたい。各分団の定数は20人であり、山を持つている分団は30人であるが、初期消火の際に、ポンプ車に乗って現場に向かうのに必要な人数は2、3人であると思う。その後に常備消防が入ることで、体制が整うのであれば、20人、30人という定数を見直す必要があると思うのだが、いかがであるか。

(意見)

特に桐生方面団についてはサラリーマン化しており、昼間の火災はほとんどの団員が出られない現状がある。そういった中では定数を維持することよりも、実際に出勤できる人材が各分団にいらっしゃる方が重要だと考える。

(意見)

定数に対して何人が欠員だということばかりを気にしていたが、2人なり3人で現場に出る、現場出勤すれば、協力体制や応援体制もあるので、現場で不自由を感じたことはない。林野火災のように大規模で長時間の対応が必要な場合は、人手が必要になると考える。

(意見)

団員の確保に関連する意見になるが、団員の役目について、火災の現場で思うことがある。火災が発生すると、仕事を持って来る人は、仕事を置いて現場に出勤して消火活動に当たり、そのまま長時間いることとなる。帰りが22時になってしまつて、これから放り出した仕事の後片付けをするといった話を聞くと、負担であるうから、なるべく早く帰りたいと思う。

例えば常備消防が消火活動している際には分団が補給してあげて、火災が鎮火したタイミングで、団員は解散みたいな形ができれば、もつと団員の負担が減るのではないかと考える。

(市長)

貴重な意見であると思う。そうした意見を精査して、見直すことによつて、負担が減り、団員になる人が増えるという構図ができてくると良いと思う。

団員の確保については大きな課題である。桐生市には群馬大学があり、また桐生市職員の協力体制も含め、様々な模案できる部分はあると思うので、引き続き意見交換をしながら良い方向に進めてまいりたい。



(市長)
もう一つ意見を伺いたいのは、訓練についてである。
団長からの説明のとおり、市役所・消防本部・消防団の参加による水書を想定した「ブライント型災害対応合同訓練」を実施したが、何が起こるか分からない中で訓練により、出てきた課題をしっかりと突き詰め、今後の対応を考えていくことが重要であると思っている。みなさんはいかがであったか。

(意見)
講評において、言い方をもっと優しくしてほしいと指摘されたことは課題になったと思うている。
また、無線交信の基本的な方法については、誰がやってもできるよう、勉強会が必要であると感じた。

(意見)
訓練では無線交信は届く形で実施したが、台風19号の時に黒保根の人たちと、交信をしようとしたができず、全然状況が見えないこととなった。
その際には、携帯電話で連絡を取ったのだが、どのような手法を取ることが一番良いのかは課題ではないかと感じた。

(意見)
訓練後に、桐生市の全分団長でLINEグループを組んだ。
情報伝達手段として無線と携帯とLINEでこれから行おうということ、例えば、本部から来た指令に対し、現場写真を撮って、送りながら指示ができるので、LINEは有効ではないかと考えている。

(市長)
無線のデジタル化による効果や無線交信の勉強会といった意見もあるので、消防において訓練の検討をするとのことである。また、活動の中でこれは大丈夫というものは、少し削りながら、新しいやり方を取り入れていくことは重要である。

(意見)
災害の起きている場所の特定について、危険箇所の沢や河川についての、場所の地図なり、そういった資料があると良い。

(意見)
災害時には地理の把握が有効になる。そうした中で、団員から数多く意見があり、改善をお願いしたいことがある。
火事の際に、消防本部からメールで位置情報が送られてくる。以前はグーグルマップがすぐ開けて現場に行けたが、今はグーグルマップが開けなくなってしまうので、改善をお願いしたい。

(市長)
メールによる位置情報の送信については、消防において、システム更新の際に検討することである。
黒保根の林野火災では、団員の方々がみんな地理とか風向きまで知っており、すごいなと思った。
災害の発生個所の特定も含め、地理については、地元の分団の誘導により、円滑な対応が取れるとありがたいと思う。



(市長)
今後、消防団における女性団員や桐生市婦人消防隊との役割分担なども考えていく必要もあると思う。
このほか、意見はあるか。

(意見)
今現在、桐生方面団、新里方面団、黒保根方面団という名称で活動しているが、名称変更が可能であれば、桐生方面団を第1方面団、新里方面団を第2方面団、黒保根方面団を第3方面団とし、桐生市で一つの消防隊とすることで、意識改革をしたと考えている。

(市長)
市民の生命財産を守るために、消防団の方々が昼夜を問わず、献身的に活動いただいていることに厚く感謝申し上げる。
昨今、激甚化する災害により、想定をはるかに超える被害が出ており、いつ、私たちがそのような状況になるかわからないので、備えを進めるべきだと考えている。

市では、台風19号の教訓を受け、避難所運営マニュアルの見直しを始め、学校の方でも、予告なしの災害訓練を行うなど、様々な取組を進めている。
また先ほど申し上げたプライベート型の訓練における様々な課題を教訓として、しっかりこれからの対策に生かしていくことが重要であると考えている。
引き続き、そうした取組に理解いただき、力を貸していただきたいと考えているので、よろしく願いたい。